

よあか 世を明るく

■ 楽曲データ

歌詞：大木惇夫 作詞

楽曲：團伊玖磨 作曲

発表：築地本願寺仏教文化研究会 1962年

初演：—

初出：『仏教讃歌 世を明るく 親鸞聖人七百回大遠忌法要記念』 築地本願寺仏教文化研究会

管理番号：M0027

■ 創作の経緯

親鸞聖人700回大遠忌法要を記念して発表。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第2巻収録

底資料：『仏教讃歌 世を明るく 親鸞聖人七百回大遠忌法要記念』 築地本願寺仏教文化研究会

比較資料：—

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

これまで数多くの仏教讃歌が発表されてきましたが、どの曲も、そのときどきの要望に応じて創られてきただけあって、それぞれに違った味わいがあり、興味が尽きません。そのなかで《世を明るく》は、歌詞にあらわされたみ教えの言葉の強さが、特に際立っている作品です。

◆ 作詞者について

作詞は、大木惇夫（1895～1977）です。大正から昭和の時代に活躍した抒情詩人で、翻訳家、作詞家としても知られています。この曲の他にも、《ゆるされし》（平井康三郎作曲）や《法隆寺》（飯沼信義作曲）などの仏教讃歌でも作詞を担当しています。

◆ 詞の内容について

歌詞は3番まであり、1番は「光明無量」、2番は「寿命無量」、3番は「撰取不捨」という、浄土真宗にとって要（かなめ）となる教えが歌われます。み仏の慈悲の光によって、人の世が明るく照らされていることのありがたさと喜びが、ひしひしと感じられる詞です。半世紀も前に書かれたものですが、とも

すれば生きる指針を見失いがちな現代にこそ読んでいただきたいと思います。

◆作曲者について

作曲は、團伊玖磨（1924～2001）です。東京音楽学校（現・東京藝術大学音楽学部）出身で、卒業後はオペラ、交響曲から歌曲、童謡に至るまで、幅広いジャンルの音楽を手がけました。この作品では、詞の意味を汲み、おおらかでスケールの大きな曲に仕上げています。

◆歌い方

前奏が5小節、歌の部分が6小節＋6小節＋7小節のまとまりという、やや変則的な曲のつくりになっています。そのため、歌っていて流れがつかみにくいと思われるかもしれません。歌詞の切れめとメロディーの切れめは、ほぼ対応していますので、まず歌詞をよく音読してみてください。そのうえで、ご自分の気持ちをしっかり歌詞にのせられるように練習してみましょう。

①歌い出しの1行が肝心です。光が辺りを隈なく照らしているさまを思い描いて、豊かな声で歌ってください。前奏の間に息を整えておき、7小節目に向かって、伸びやかにクレッシェンド（次第に強く）します。

②歌の最初のフレーズは、2小節ずつを小さな区切りとしながら、6小節が大きくひとまとまりになるようにします。

③8～10小節目は、1拍めに8分休符があります。

④10小節目3拍めの弱拍（シb）が、次の言葉の語頭になります。少し注意して言い直すようにするとよいでしょう。

⑤歌詞の意味に合わせて、14小節目で一時的に暗い調になり、15小節目4拍目で明るい調に戻ります。伴奏をよく聴いて、変わりめを感じて歌うようにしましょう。

⑥17小節目の「ん」は、口をあけたまま軽く鼻にかけるように発音します。気持ちのうえでクレッシェンドしてください。

⑦18・19小節目が、いちばん盛りあがります。伴奏のメロディーが先行しますので、それに乗りかかるようにしてフォルテ（強く）にもっていくと、自然に山場をつくれます。

⑧20・21小節目は、ご自分の心にたたみかけるように歌いましょう。8分休符に気をつけてください。

⑨最後のお念仏で、もう一度盛りあがって終わります。

解説執筆：石川紀久子（本願寺仏教音楽・儀礼研究所 [現・浄土真宗本願寺派総合研究所仏教音楽・儀礼研究室] 委託研究員）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 75（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第202号収録）を加筆・修正のうえ、転載。